

## 2. 共晶会と材料系教室の変遷

### 2.1 共晶会の沿革

(出典：共晶第17号、1996年6月、p.6)

#### 共晶会の生い立ち

市川 理衛 (昭和17年卒)

私達は昭和14年に創設された帝国大学の理工学部金属学科に昭和15年に入学し、途中で工学部となり、卒業は昭和17年秋であった。卒業後満50年を過ぎた今共晶会という名を作り出した第1回生の誰かゞその誕生のいきさつを手記として残すのも意義があると考えて記すことにした。これについて平成5年7月共晶会総会でお話はしたが以下はその概要を主としたものである。

在学中共晶会が生まれたのであったが、年移り昭和39年に会誌共晶が創刊され、その時私が共晶会長をおおせつかっていたので会誕生のいきさつを創刊の辞の中で次のように述べている。『昭和16年頃武田先生からのおすすめによったものと記憶致しますが、学生のクラス会を共晶会と名付けました。共晶会とは学生達が緊密に親しみ合うべきことを合金の共晶を象徴して名付けられたものであります。その後昭和33年秋同窓会第1回総会におきまして大学創設期の共晶会の名をそのままとって同窓会名として再発足致しました。』また表紙の字は『金属学科の創設にあづかっていたゞきました旧職員であられた東北大学名誉教授村上武次郎先生の御指揮をいたゞく事を得ました』とあり、役目柄私が仙台の村上先生のお宅に伺い色紙をいたゞいて帰ったようなわけで創刊号発行の当時教室主任は井上先生、そして副会長の坂尾先生、編集担当理事の益本先生、財務担当理事の上田先生およびその他の同窓の先生方のお骨折りで創刊号が生まれたと思っている。



去る7月私が総会で思い出話をするに当たって共晶会成立のいきさつを再確認のため同じ第1回の友人のうち5君に当時を思い出して貰った。その答は私が当時の記憶から創刊号で述べたのと大同小異であり、要は武田先生のおすすめだった。講義室で皆が思い思いに黒板に名前を書いてその中から決めたが、発想は武田先生の状態図の講義が皆の印象にあった。時期は創刊号で16年頃と述べたが卒業間近だったとの意見もあり、昭和16年後半から17年前半頃の間であったろうか、永井君が大学に永く残ったから事情は彼がよく知っていたはず、などであった。

以上のような経緯で共晶会は誕生したが、工学部は戦火で壊滅し本格的復興は昭和20年代終り頃からと聞いていたから、卒業後大学に残られた各回の皆さんが伝えて第1回総会での決定まで持って行って下さったものと私は考えている。この事情は古い卒業の方々にはよく御存じと思うが、さらに鉄鋼工学科も設置され半世紀をこえた今はその後の卒業の方々の方がはるかに多数であるから、昔はこんな事だったとの記録のつもりで共晶会の生い立ちを記した次第である。